二〇二四年十月五日

今日の給食は、チキンカレーとグリル野菜。人気メニューの一つである。

三時間目は体育、休み時間は体育祭練習、今日はかなり運動をしたので、お腹がすいている子が多かった。そんな時に、みんな大好きカレーである。クラスは、いつもよりもテンションが高くなり、食事中の会話も弾んだ。あまりにも楽しくなったので、いつの間にか担任も会話に入ってきた。学級会のような話し合いになってきた。

「給食って、ウーバーイーツで配達してくれないのかな。この間休んだときで、ハヤシライスだったから、家に届けてほしくなったよ」

「お母さんも、たまに給食を食べてみたい、って言ってたことがある。お金払ってでも食べたいって」

「うちの兄貴なんか、今暇だから、扇小に行って給食食べさせてもらおうかな、なんて言ってた」

「みんな、この給食を食べられるのも、あと

少しなんだよ」

「中学校に行っても、食べに来ていいようにならないの？」

「卒業生なら、誰でも食べに来ていいように

すればいいのにね」

「外に出られないお年寄りには、給食委員会の子が届けてあげたら喜ぶのに」

「児童会室をお昼だけ食堂として開放したら、たくさんの人が来て、もうかるかもしれないぞ」

「調理員さんがたいへんそうだ」

「調理員さんを増やして、調理室も大きくして、もっとたくさんの人が扇小の給食を食べてくれたら、楽しそう」

「もうかった分だけ、給食も豪華になるし」

「給食のもやしラーメンができるカップ麺を売り出しても、もうかるかもしれないぞ」

「休みの子が多い日は、残ったパンとかを、コンビニで売ってもらうのはどう？」

「買う人いるかな？」

「十円くらいにしたら売れるんじゃない」

「五つで五十円とか」

「じゃあ、こんなのはどう？給食がもし余ったら、それを料理にしてくれるレストラン

を近くに作るの。そうすれば、もったいなくないし、給食を食べたい人が食べに来るかもしれない。」

「土曜日や日曜日。夏休み中だって、給食だけ食べに来ていいようには、ならないのかな？」

「そんなことしたら、調理員さんが休めないじゃないか」

「いいこと考えた、給食を多めに作ってもらって、晩ご飯用に持って帰っていいとか。そうすれば、お母さんが助かるかも」

「お母さんを助けたければ、自分で夕食作ればいいじゃないか」

「お母さんが、たまに給食食べたいって、言ってたから・・・」

「そういえば、あなたのお母さん、すごく料理が上手だよね。前に遊びに行ったとき、超おいしかった！」

「じゃあ、みんなの家の得意料理を、給食に出すっていうのはどう？」

「今日は、シンジョー家自慢のドリアとか」

「おもしろいね」

「だったら、みんなでその子の家に行って、食べさせてもらった方が早いじゃん」

「確かに。でも学校でみんなで食べるから、給食なんじゃないの？」

「じゃあさ、みんなで夜に集まって、給食を食べたら楽しくない？」

「いいねー。卒業記念、晩ご飯給食！」

「その時に、家から自慢の料理を持ってきて、バイキングで食べられるようにしたらどうかな」

「そんなに食べ切れるかよ」

「全部食べるまで、帰れまテン、なんて」

「ついでに、大食い選手権もやるか」

「マックス鈴木やギャル曽根だったら、全校分の給食、食べられるかな」

「あんまりしゃべってばかりいると、全部食べられませんよ。残さず食べましょう。でも今日の話は楽しかったね。いつか実現する日が来るかもしれない」

「先生はいいなー。ずっと給食食べられるんだから」

「その通り。給食と夏休み、そして子供たち。先生の幸せベスト3。」

放送が流れて掃除が始まった。無言で掃除を始めたシンジョーは、給食の時の話を思い

出して笑(わら)いがこみ上げてきた。そんな顔を友達に見られたくないので、何となくいつもよりも下を向(む)いて取り組んだ。

肩組んで　仲良く　勉強しよう

昼休みの校庭には校歌が流(なが)れている。シンジョーは、いつもより楽しい昼休みになったのは、おいしい給食のおかげだと思った。